

地域の風景を素材とした アーティストインレジデンスの実態分析

横山 美和¹・羽藤 英二²

¹学生非会員 東京大学大学院 工学系研究科 (〒113-8656 東京都文京区本郷七丁目3-1)

E-mail: yokoyama@bin.t.u-tokyo.ac.jp

²正会員 東京大学准教授 工学部都市工学科 (〒113-8656 東京都文京区本郷七丁目3-1)

E-mail: hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp

本研究では地域の景観的まちづくりに着目し、近年各自治体やNPOなどが中心となって行っているアーティスト・イン・レジデンスの活動と地域活性化の原理について報告する。アーティスト・イン・レジデンスとは、様々な芸術的創作活動を行う人物を招聘し、一定期間住まわせ、そこに滞在させながら、制作させる事業を意味する。本研究では香川県小豆島におけるレジデンス活動を事例に述べる。具体的に本研究では、そこで行われた活動の歴史やその経緯について調査し、選抜・招聘されたアーティスト、地域住民、役場などの各人を訪ね、インタビューを行った結果を用いて、その人間関係における紐帯を分析し、アーティスト・イン・レジデンスが地域活性化に及ぼす影響とそれらの活動が継続的に行われる仕組み、制作された作品とその場所性についても議論する。

Key Words : Art, Artist in Residence, town development on a regional scale, regional resource

1. はじめに

近年、芸術を用いたまちづくりが全国各地で盛んに行われている。その多くは、地域振興、地域活性化を目的として、芸術を用いるという立場をとっている。現在、芸術を用いたまちづくりには、都市の中に実際に建築設計されるギャラリーや美術館の導入のほか、広場や道路、公園、オープンスペースなどの公共空間に設置されるパブリックアート、まちあるいは都市、その地域全体を使って行われる芸術祭やトリエンナーレといったアートプロジェクト、実際に芸術家をまちに招聘してワークショップや制作を通した展覧会を行うアーティスト・イン・レジデンスなどがあり、運営する母体も、展示され表現される作品も、その形態も、そしてその展示方法も場所も多様化しているのが現状である。

こうした環境に置かれた芸術の役割を考えてみると、従来の芸術があわせもつ、自己においても他者においても人の創造性を育む行為を生むということだけではない、人と人、人と社会、そして人と地域とを結びつけるコミュニケーションツールとして機能し、その土地に対し、芸術は物語や出来事を編み出していく発端となる役割を

担っていると考えられる。従って、多くの自治体やNPOが、こうしたまちづくりの施策を積極的に取り入れていることは、ごく自然な現象として捉えられよう。

しかしながら、その事業評価や事業そのものについてはこれまで十分な議論がなされていないのも事実である。強いて言えば、実際行った活動や取り組みについては対外的に結果として報告され、評価もまた経済的指標や数値を公とする一方で、その中で具体的に誰がどの時点でどのように関与していき、結果としてどのような行為が認められ、活動・貢献に値していったかといったプロセスに関しても触れられていない場合が多い。とりわけ、本来の目的である、地域振興や地域活性化に対しての目に見えない効果は、いずれも波及的影響として簡単に整理されてしまっている。

このことは、芸術を用いたまちづくりにおける問題だけでなく、まちづくり全般に言えることでもある。実際、まちづくりを進めるにあたって、今後事業を実施しようとする側が参考にしたい情報とは、体制構築、コンセンサス形成、予算確保といったハウトゥに係る情報、担当者の苦労点や解決方法の情報のほか、最終的に目標に辿り着くまでの「過程部分の情報」も必要であると報

告されている¹⁾。このことから、他地域がとある地域におけるまちづくりを参考にして、自分たちのまちづくりに活かすには、現状まだ不十分であり、事足りている情報が与えられているとは考えにくい。従って、ここでは必要に応じてわかりやすく提示・解釈することが求められる。

そこで、本研究では上述した芸術を用いたまちづくりの中でも、アーティスト・イン・レジデンス事業を取り上げ、具体的な事例に沿ってその実態について明らかにすることを目的とする。

2. 研究の目的と位置づけ

一般的に、アーティスト・イン・レジデンスとは、様々な芸術的創作活動を行う人物を招聘し、一定期間住まわせ、そこに滞在させながら、制作させ、その滞在中の活動全般を支援する事業・制度である。欧米で第二次世界大戦後に始まったと言われるこの制度・事業は当初、芸術家が異なる場所や環境に身を置くことで生まれる文化交流の視点、そこで制作することで創られる芸術作品への期待、ホワイトキューブと言われる美術館やギャラリー等の閉じた空間からの脱却を目指すなど、時代とともに変化する芸術への模索を意識したものであった。いずれも、これは芸術家の育成・支援に重きが置かれており、現在でも欧米では芸術家たちの間でアーティスト・イン・レジデンスは若手芸術家の登竜門であるという認識が強い。

一方、我が国では1990年代頃からアーティスト・イン・レジデンスが次第に注目されるようになった。特に、1997年に文化庁が地方自治体と取り組みはじめたのをきっかけに、急速に広がりを見せた。その結果、欧米とは対照的に我が国では地域振興や地域活性化が第一目的とされることが多くなり、芸術家を支援しながらも、芸術家が地域に貢献することが求められるようになった。これは自治体の参画による直接的影響が大きいと考えられるが、実際には芸術や文化の意味を軽視してまちづくりに生かそうとする安易な動きを助長させたとも言われている。

こうした背景の中で、芸術を用いたまちづくりに関わる研究は、少しずつすすめられてきている。各地のアーティストイベントを取り上げその効果を評価しうる研究²⁾ 廃校や空き家の有効性についてアートイベントの視点からの可能性を議論した研究^{3) 4)} 作品と設置場所による類型化や作品と展示空間特性との関係を試みた研究^{5) 6)}、などがある。また、アーティストインレジデンスに関する研究は、アートマネジメント分野や文化資源学の分野で主に行われているが、そのほとんどがアーティストインレジデンスの歴史的概観⁷⁾ や現状の分析⁸⁾、文化政

策における位置づけを確認するもの⁹⁾ がほとんどである。また、こうした研究の手法としては、本研究同様、関係者にインタビューやアンケートを試みているものが多い。しかし、実際の作品の制作者である芸術家に対し、インタビューを試み言及したものは現時点では見受けられない。従って、本研究はこの点において独自性がある。

3 研究方法

本研究では自治体が具体的に関与する香川県小豆島のアーティスト・イン・レジデンス事業を取り上げ、その参画の仕方と、そこで生まれた芸術家と地域住民との交流やその目に見えない効果に対し調査分析する。具体的に本研究では、そこで行われた活動の歴史やその経緯について調査し、選抜・招聘されたアーティスト、地域住民、役場などの各人を訪ね、インタビュー調査を行った。本研究の成果は、2010年の10月、11月に行った現地調査を主としており、その手法はオーラルヒストリーの手法に基づくものである¹⁰⁾。オーラルヒストリーとは、関係者から直接聞き取り、記録としてまとめることを指す。基本的に調査はインタビュー2名で行い、芸術家が滞在中の行った現地調査では、自治体に対しては主に、アーティスト・イン・レジデンスの概要とその経緯、予想される効果について聞き取りを行った。芸術家に対しては、これまでの自身の経緯、主にどのような作品を制作してきたかを軸に、なぜここに応募したか、アーティスト・イン・レジデンスに対して思うことなどについて聞き取った。その他、地元住民には、アーティスト・イン・レジデンス事業についてどう思うか、どのように関わっているかなどについて調査した。その上で、本事業が終了する、つまり、招聘された芸術家が作品を制作し、それぞれがそれぞれの住む地元へ帰京する頃に、再度芸術家のみに調査を依頼し、招聘された芸術家3名のうち、2名はインタビュー調査、1名に関しては電話調査を行い、制作した作品について、また、滞在中の出来事、地域との交流、過ごし方について聞き取り調査を行った。

2. 小豆島アーティストインレジデンスの概要

瀬戸内海に浮かぶ小豆島は香川県に属し、小豆島町と土庄町の2町からなる小豆郡で構成される、人口32000人の瀬戸内海では一番大きな島である。また、小豆島はかつて、猪熊弦一郎や小磯良平といった芸術家らが創作活動を行っていた土地がある。本研究では、小豆島アーティスト・イン・レジデンスの事業についての概要とその経緯について、運営する香川県庁と小豆島町役場に対してインタビューを行った。本章では、その調査結果を主な資料として、以下にまとめる。

(1) 概要

本事業の目的は、若手芸術家の創作活動を支援するとともに、地域の人々との交流を通じて、文化芸術による地域の活性化である。そのため、招聘された芸術家は、滞在中、地域の文化、環境などからアイデアを得て、創作活動を行い、新たな作品を制作すること、そしてまた、芸術家には、その成果発表や地域との交流プログラムなどを積極的に行うことなどが求められる。平成21年度よりはじまった本事業は、公募によって芸術家を募り、選定、年に2回、春と秋の季節にそれぞれ2～3名ほど招聘される。招聘された芸術家には小豆島の公共施設（小豆郡小豆島町三都地区）を活用したアトリエと宿舎、移動のための軽自動車を提供され、生活費・制作費を月10万円、三ヶ月に渡り支給される。アトリエは旧三都小学校教室、宿舎は旧三都幼稚園であった老人憩いの家、元教員住宅であった旧町営住宅である。芸術家は招聘されると、まず、開村式を行う。開村式のあとに、その地域の重要要となる町長、自治会長、老人会長、町議会などの人物を町役場によって紹介される〔図-1、2〕。そうした人間関係をはじめとして、芸術家たちは必要に応じて、コミュニケーションをとっていく。例えば、制作に必要な道具を貸してほしい時、島の歴史を聞きたい時、花岡岩の石について知りたい時など状況に応じて人間関係をそこから深めていく。時折、アトリエにふいに訪れる来客とも関係を築いていき、次第に地域住民の交流は晩ご飯を共にするなどの深い関係となる〔図-3〕。そして、こうした人間関係を通して、芸術家たちは作品を制作していき、同時に、展示場所の選定も行う。作品の展示場所は基本的に芸術家に委ねられるため、芸術家は滞在中、制作する作品のイメージに思いを巡らせながら、島内をくまなくみてまわり、展示場所を決定する。

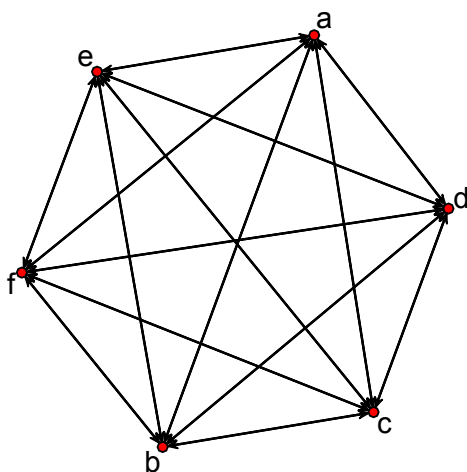


図-1 小豆島三都地区における主要人物による紐帯

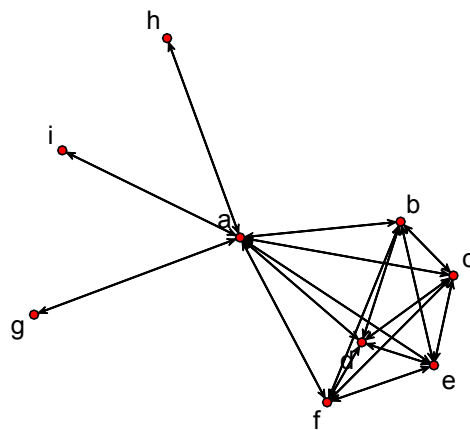


図-2 役人が芸術家たちを主要人物らに紹介する

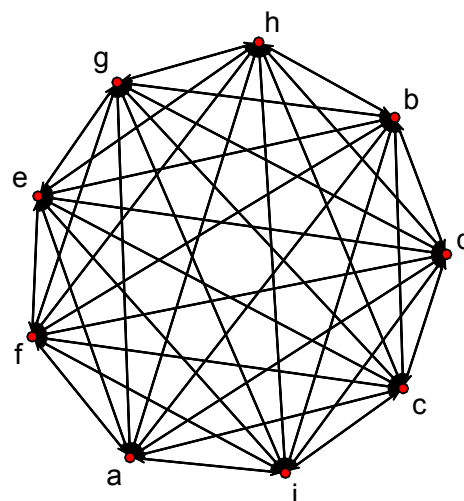


図-3 最終的な小豆島三都地区における人間関係の紐帯

表-1 招聘芸術家の制作作品ジャンル

第一回目	作家A	インスタレーション
	作家B	インスタレーション
第二回目	作家A	インスタレーション
	作家B	インスタレーション
	作家C	日本画
第三回目	作家A	彫刻
	作家B	インスタレーション
	作家C	絵画・インスタレーション
※第三回目のみ、瀬戸内国際芸術祭連携事業として、これまでの招聘芸術家8名と東京藝術大学教員・学生14名による合同作品展が開催された。		
第四回目	作家A	写真・インスタレーション
	作家B	彫刻・インスタレーション
	作家C	彫刻・インスタレーション

表-2 招聘芸術家の展示場所

第一回目	作家A	旧二生小講堂, オリーブ公園, アトリエ
	作家B	オリーブナビ, 中山歌舞伎奈落, アトリエ
第二回目	作家A	夢想館
	作家B	夢想館, 吉野瓦倉庫, アトリエ
	作家C	夢想館, 蒲野民家, 蒲野波止場
第三回目	作家A	吉野瓦倉庫,
	作家B	アトリエ
	作家C	蒲野高橋邸
第四回目	作家A	神浦黒島倉庫
	作家B	神浦出水邸, 旧小豆島三都小学校
	作家C	蒲野民地, 旧小豆島三都小学校

また、制作された作品は基本的に寄贈され、保管されることになっている。

(2) 経緯

小豆島における芸術村構想は、東京藝術大学における平成16年度学長プロジェクト「地方自治体との連携による芸術家村構想」が発端となっている。このプロジェクトは「いかにして地域住民や地方公共団体等と連携し、芸術家が住まい、制作し、創造的な活動を行なうための環境を形成していけるのか」を基本概念としており、同大学美術学部デザイン科を中心に、小豆島を「芸術家村」構想の候補地として視察後、同構想の具体化に向け、小豆島町（旧内海町・旧池田町）が香川県に対し協力を要請した。県は「香川県文化芸術振興計画」の中で戦略的重点事業の一つとして位置づけ、小豆島町にはまちづくり総合プロジェクト、アートアイランド推進部会が結成された。この背景には、この地域が抱える少子高齢化の問題のより、閉校や空き家をよぎなくされた余剰施設を有効活用し、若手芸術家が来訪し、交流することによって、賑わいをみせたいという思惑があった。しかし、この間、総務省が中心になって進めていた近年の市町村の再編政策によって、この構想は一時中断されるが、平成18年には、小豆島町（旧内海町・旧池田町）の誕生により、再び検討されることになった。平成19年度には、小豆島町が、芸術家村の施設整備に要する経費の支援を合併市町村資源活用事業として財団法人地域活性化センターに要求し、平成20年度に受託。平成20年度中に施設整備および改修を行い、これと並行した県と町の協議では、受け入れ等のソフト面を県が、施設整備などのハード面を町が対応することが決定され、年度末の3月には芸術家を招聘し、芸術家村を創設、アーティスト・イン・レジデンス事業を実施する運びとなった。

表-3 小豆島芸術家村における自治体の役割分担

小豆島	アトリエ・宿舎などの整備 受け入れ体制の準備 創作活動支援・生活面サポート 住民交流やワークショップ実施
香川県	芸術家募集 芸術家の選定と決定 芸術家招致 旅費・滞在費・制作費の支援

(3) 効果

運営側である香川県・小豆島が期待する効果は、以下の通りであった。芸術家は金銭的な支援を含めて、創作活動の場の確保が約束される。地域住民は身近に芸術を感じ触れることができるほか、特に高齢者は若者がくることによって活力を与えられる。運営側は地域活性化、定住促進、香川県・小豆島の魅力を発信できるなどの効果を期待していた。そこで、それらのことを、地域住民にも聞いた結果、ほぼ運営側と同等意見で本事業を捉えていることがわかった。さらには、地域住民の意見では、島に入る芸術家たちによって、普段気づくことのない風景や残された島の資産を知ることができるという意見が伺えた。これは、経済的指標や数値では表すことのできない効果だと考えられる。以下は、地域住民へのインタビューの抜粋である。

・小豆島の吉野地区の山をあがって下がったところの海の風景は、普段車で通っていても特別な風景だとは思わない。ところが、外から来る芸術家はその風景をみて感動するから不思議だ。

・小豆島は地区ごとに別れていて、めったに他人の地区にいくことなんてない。だから、みんながここは良かったという話を聞かされて、その山の風景を見に行ったら、自分も知らない風景があって、島のことを自分は知らないんだと思った。

・瓦倉庫をつぶそうという話があったが、ここは若い人たちがいい空間だということで、残そうということになった。三都の山の上の神社もそんなことがあった。

他方、芸術家らへのインタビューにおいて、本事業に応募した理由と聞いてみたところ、制作場所の確保、制作資金の確保が主な理由として挙げられた。日本では、一般的に芸術そのものの理解が必ずしもある状況だとは言いがたい。無論、作品をつくりたくてもつくる場所がないという現状がある。あわせて、特に若手芸術家の場合、資金を調達するのも難しい。そのため、アートコンペやこうした事業を通して作品を制作し、公開する機会を求

めている若手芸術家は極めて多い。従って、その点では、理にかなったシステムだということができる。しかしながら、若手芸術家を育成するということに焦点をあてて聞いてみると、必ずしも本事業が芸術家を支援できているとは限らないことがわかった。芸術家はキューレータのような制作に助言できる人物の必要性や芸術に関心を示し、少しでも理解ある多くの鑑賞者に見に来てもらうなどの措置が欠けているのではないかと指摘した。これは、上述した通り、自治体が参画することで、地域振興や地域活性化の目の前の目的ばかりが進行し、本来の芸術家の育成については十分な配慮がなされていないことを示している。ゆえに、こうした事業を展開するにあたっては芸術家の育成に関しても支援しうる体制を運営側が意識し、議論する必要性がある。

3. 制作した作品を通じた地域資産への考察

本章では第四回目の招聘された芸術家らへのインタビューを通して、制作された作品と場所性について論じる。具体的には、これまでに制作された作品の傾向と今回の招聘で制作した作品のプロセスについてインタビューを抜粋しながら述べ、最後に芸術家がもたらす目に見えない効果について報告する。

(1) 芸術家A (写真・インスタレーション)

応募した理由はかねてからアーティスト・イン・レジデンスに興味があったから。第一回目から応募した、その時は落選したが、つくりたい作品の意図は今と変わらない。自分の作品の中で風景を360°から天空からとる写真のインスタレーションがある。これまでふるさとの山形月山などで撮影を行ってきたが、標高が800m山から全風景の空がどのように映るかと思ったため、作品ありきで応募した。山の頂上から360°天空を撮影できる場所を探していたら瀬戸内海には星ヶ城山があることを見つけた。Googleで見つけた。調べてみると、瀬戸内海で最も高い山であり、瀬戸大橋と大鳴門橋と明石海峡大橋が見渡せる星ヶ城山は、瀬戸内海中央部、小豆島町の中央東部にある標高817mの山と四方指という標高777mの展望台がある山があることがわかった。目の前にある風景を吸収する作品を制作したかった、地域の人には、普段のいるところの様子でしかみれない。だから、この土地に住んでいる人に、はねかえすような、いつも見ている風景を鏡を通してみたいとも考えた。俳句のような感じ。ここでの生活は2日に一度、山に登り、撮影して編集してを繰り返した。とにかく目の前にある風景を吸収したかった。展示場所は小豆島の神浦にある黒島倉庫。本津は吉野地区の鉄筋コンクリートの瓦倉庫で行いたいと考えていたが、オーナーが許可してくれ

なかったので、納屋の黒島倉庫にした。展示場所は制作した作品が投影でき、かつスクリーンのようになって、鑑賞者がそのスクリーンをみれるようなスペースが確保できる場所を選んだ。僕は吉野の海の風景がとても気に入っている。ガラスの橋を架けたいと思った。次はそれに挑戦しようと思っている。

(2) 芸術家B (彫刻・インスタレーション)

とにかく制作場所を探していた。自分自身の作品は場所性を読み取るということをやってきたので、実際にこの土地に住んで得られた、感じられたものを作品にしたと思って応募した。発表する制作する機会が欲しかった。制作した作品は、この場所に実際に住んで感じたことから、世の中無責任とはまではいれないが、無責任なものほど使ってほしいと思うものはある。機能としては使われなくなったものの意味を感じてもらいたいと思った。一つ目の作品は蒲野の原っぱでドライフラワーを集めて、使われなくなった小学校の教室に、使われなくなった机に、使われなくなった針のない時計やカバーのない辞書、鳥のいない鳥かごなどを並べて展示した。蒲野の原っぱでドライフラワーを集めた。使われなくなったもの。二つ目の作品は神浦の空き家の畳二間を使った。ここらあたりでは一般的な家屋の作り方だと思うのだけど、中庭に納屋、母屋という閉鎖的な空間は、静かで重厚で居心地のよい、光の入り方も、生活のにおいがしないとは考えにくいほどよいバランスだった。展示空間の畳二間の奥行きが独特の雰囲気を出し、シークエンスがあった。無限に広がるような、そして闇になるような矛盾、不思議さがある、もちろん空き家だから電気はないのだけどその暗い空間に想像力が働いた。ここに決める前は、吉野棧橋や瓦倉庫を考えていたが、ここに来てここでやりたいと思った。ここで制作した作品はこの空き家に残された家具や食器を墨で満たして焦点を当てた空間全体を使ったインスタレーション。家の表情や仕草を取り入れ、無限に広がる闇を作品に投影した。

(3) 芸術家C (彫刻・インスタレーション)

私は石彫を中心に活動してきた。小豆島には良質な石があるから、石が採れる土地で制作したいと思って応募した。小豆島で生活して見ると、海に浮かぶ島や船、天候や時間によって変化していく海の景色が印象的だった。穏やかな波が太陽の光によってキラキラ光ったり、ものすごい風と共に大きく波打つ風景など自分が感じた様々な風景をここで採れる花岡岩を用いて作品にしようと思った。その作品は県道の三都港平木線沿いにある蒲野の民地に展示した。小さな海の風景表現した。また、アトリエ展示では、海辺で集めたガラス片や石などの材料を使って小さな海の風景を額の中で表現した。

以上により、わかることは、芸術家らは常に場所と対話しながら作品のイメージを膨らませ、形にしていける。招聘された芸術家らに共通しているのは、その土地に住まう人々が普段意識していないような風景やそこにある資源を見つけ、それらを切り取り、何らかの形に残すことを作品に反映している点である。これは芸術家の専門性と制作スタイルの違い、そのプロセスに差があるものの、芸術家がこれまでに体験したことのない場所に一定期間住まい、場所と対話することで生まれる客観的な、有益な情報であり、それは島の魅力となりえる。こうした芸術家たちによってもたらされる地域の風景や資源はその地域の再発見につながる。それは、この場合、山の上の何もない一面の空であったり、吉野の海の風景の美しさ、取り壊されようとした瓦倉庫、原っぱにたたずんでいる草花、島伝統の家屋、様々な表情を見せる海の風景、地域資源である花岡岩などである。これもまた目に見えない効果である。従って、自治体が本事業を有効活用するには、こうした芸術家が発見した地域の風景や資源を有効に利用し、地域の魅力を発信する仕組みをそこに兼ね備えることが求められるといえる。

4. まとめ

本研究では香川県小豆島のアーティスト・イン・レジデンス事業を事例として、現地調査ならびに関係者によるインタビュー調査をもととし、その実態について詳細に述べた。そうすることで、実際にどのように事業が行われ、進められたかなど文献資料からでは見ることのできない事業そのものの実態を明らかにすることができた。また、芸術家との制作された作品についてのインタビューから、芸術家は作品制作を通して、そこに住む住民には発見できない地域の魅力をもたらししてくれることがわかった。

参考文献

- 1) 経済産業省：平成 19 年度 まちづくり成功事例分析研究会議事次第，中心市街地活性化事業のマニュアル作成に関する検討調査結果から（まちづくりアドバイザーと TMO 対象のアンケート平成 19 年 3 月），2007.
- 2) 新田りら：現代アートイベントによる市街地活性化の試みに関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-1，pp. 895-896，2003.
- 3) 小川泰文，森傑：中山間地域のコミュニティ賦活における廃校活用方法としてのアートイベントの可能性：新潟県十日町『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ』に注目して，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-1，pp. 1221-1222，2010.
- 4) 田中遵，荒木晋作，高橋佳祐，日高單也：芸術の導入による空き家再生の有効性と今後のあり方：大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ「空家プロジェクト」における空き家再生を通して，日本デザイン学会研究論文集デザイン学研究，56(4)，pp. 1-10，2009.
- 5) 葛島隆之，若山滋，夏目欣昇：サイトスペシフィックアートにおける場所性の分析と建築，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2，pp. 585-586，2008.
- 6) 上段 貴浩，脇田 祥尚：アートイベントによって顕在化する歴史的市街地の地域資源--「からほりまちアート」を事例として，日本建築学会計画系論文集 75(658)，pp.2873-2880，2010.
- 7) 柴田葵：アーティスト・イン・レジデンスの前史としての彫刻シンポジウム，環境芸術学会論文集 (9)，pp.81-86，2010.
- 8) 中嶋裕，渡辺俊：アーティスト・イン・レジデンスの効果と継続に向けた課題：地域との関係構築の視点から，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-1，pp.295-296，2010.
- 9) 田澤紘子，永良丙：アーティスト・イン・レジデンスによる地域活性化に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-1，pp.983-984，2005.
- 10) 御厨貴：オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録，中公新書，2002.

(2011.3.4 受付)

A CASE STUDY ON TOWN PLANNING AND THE ANALYSIS OF THE ARTIST IN RESIDENCE

Miwa YOKOYAMA, Eiji HATO

The purpose of this study is to examine the impact of the Artist in Residence. Artist-in-Residence is a kind of art program to invite some artists from different community. There has been a renewal of interest in the Artist-in-Residence for the town development on a regional scale, especially among the local governments and ordinary citizens in recent years. The following approach was employed in this analysis as follows. This study interviewed some of the people that were involved with the problem. We used the transcripts of the recordings of our conversations. It is very important to consider the cultural background of the people. The information derived from such investigation is seen to be of value to the town development. This work sets out to investigate social role and the differences in social role between peoples of regions, eras, and groups in Artist-in-Residence of Shodoshima.